

国民の状況について

－ 目 次 －

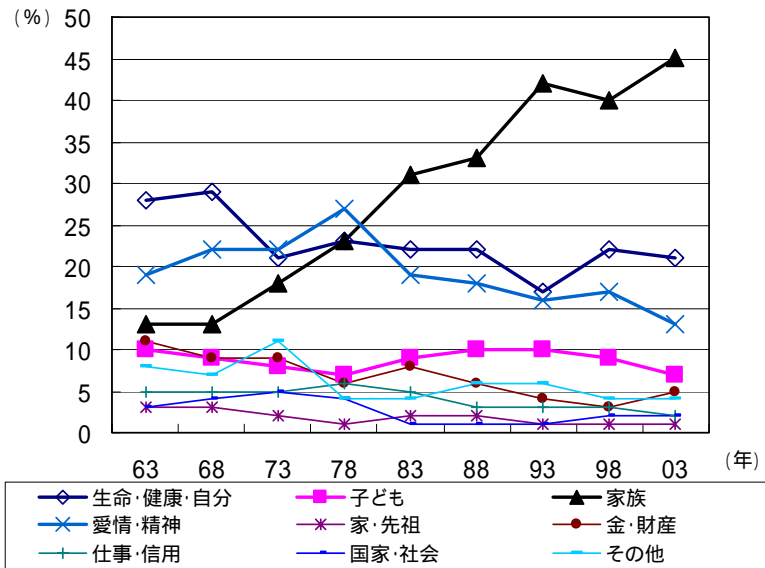
1 . 国民の意識一般について	
(1) 価値観等	1
(2) 社会・国に関する考え方	3
(3) 性別に関する考え方	6
2 . 環境の状況についての実感	7
3 . 環境保全行動の実施状況等	9
4 . 環境保全活動を行う民間団体への参加	12
5 . 環境情報への関心・満足度	15
6 . 環境と経済の好循環に関する意識	18
7 . 国際比較	22

1. 国民の意識一般について

(1) 価値観等

「一番大切なもの」についての回答は、「家族」に一極集中しており、40年間で3倍になっている。

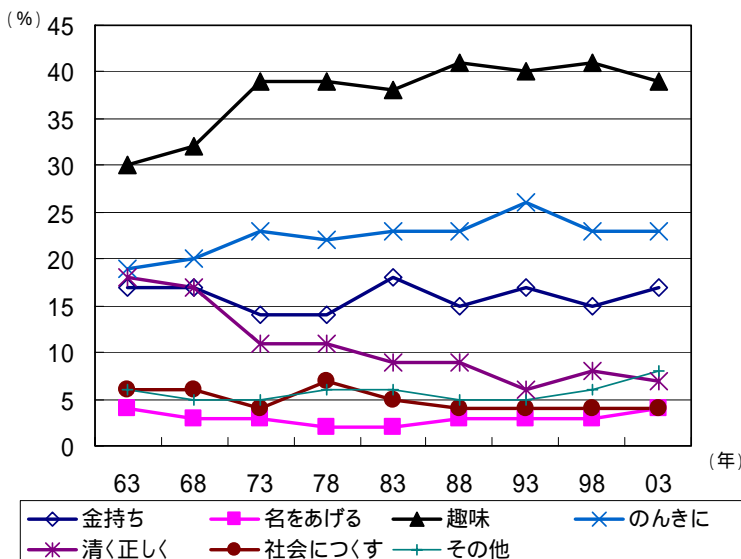
(図1 - 1) Q.「一番大切なもの」は何か。



出典: 統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

「清く正しく」くらしたいと考える人の割合は低下傾向を続け、「趣味重視」「のんきに」など、自分本位のくらしを望む割合が高い。

(図1 - 2) Q.どのようにくらしたいと思うか。

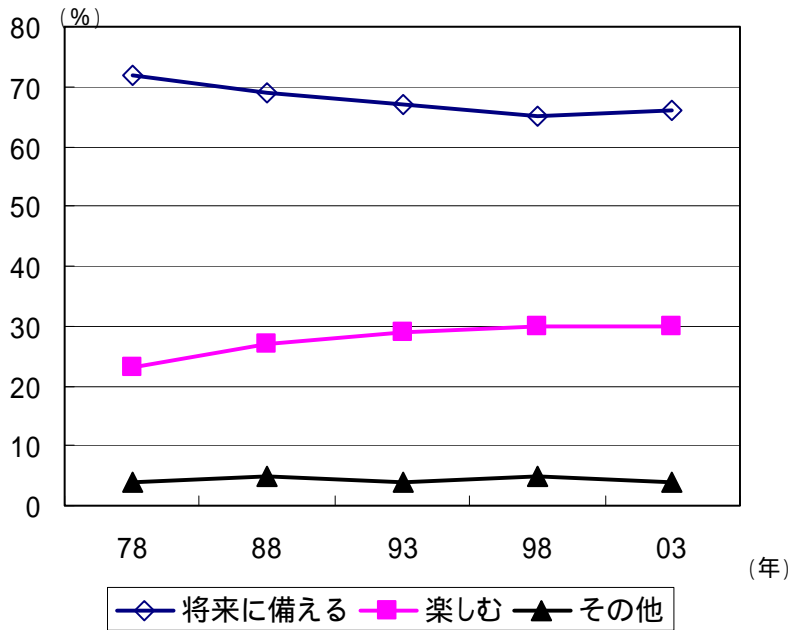


- 1 一生懸命働き、金持ちになる
- 2 まじめに勉強して、名を上げる
- 3 金や名誉を考えず、自分の趣味にあったくらしをする
- 4 その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらす
- 5 世の中の正しくないことを押しつけて、どこまでも清く正しくくらす
- 6 自分の一身のことを考えずに、社会のためにすべてを捧げてくらす
- 7 その他

出典: 統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

「将来に備えるより、今を楽しむべき」という考え方の増加に歯止めがかかり、揺り戻しの傾向も見られる。

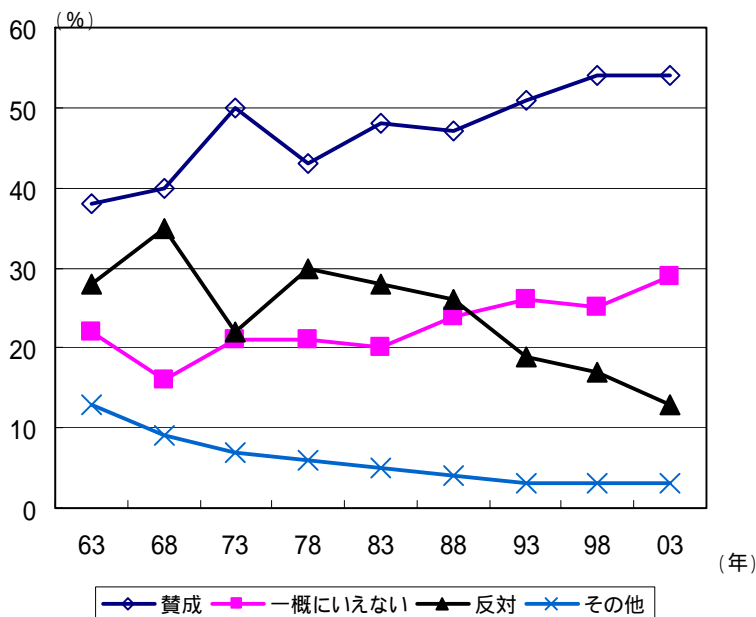
(図1 - 3) Q.若いときは、将来に備えるための時期であり、同時に楽しむための時期でもあるが、どちらに重点を置くべきと思うか。



出典: 統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

科学や技術の発達とともに、人間らしさの喪失を感じる人が増加を続けている。

(図1 - 4) Q.「科学や技術が発達して、世の中は便利になるが、それにつれて人間らしさがなくなっていく」という意見に賛成か。

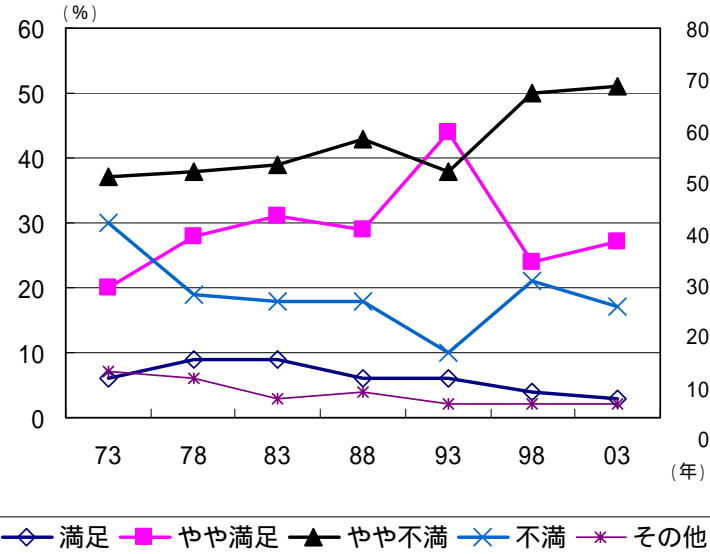


出典: 統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

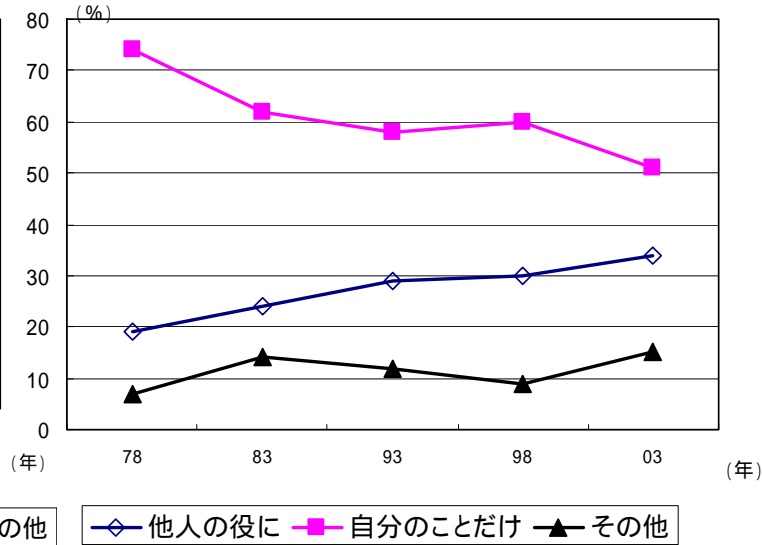
(2) 社会・国に関する考え方

社会に対して、「満足」と感じる人が減少を続ける一方、「やや不満」と感じる人が増加している。他方で、国民全体の傾向としては、自分のことだけではなく、他人の役に立とうとしていると感じる人が増加している。

(図1 - 5) Q.社会に対して満足しているか。



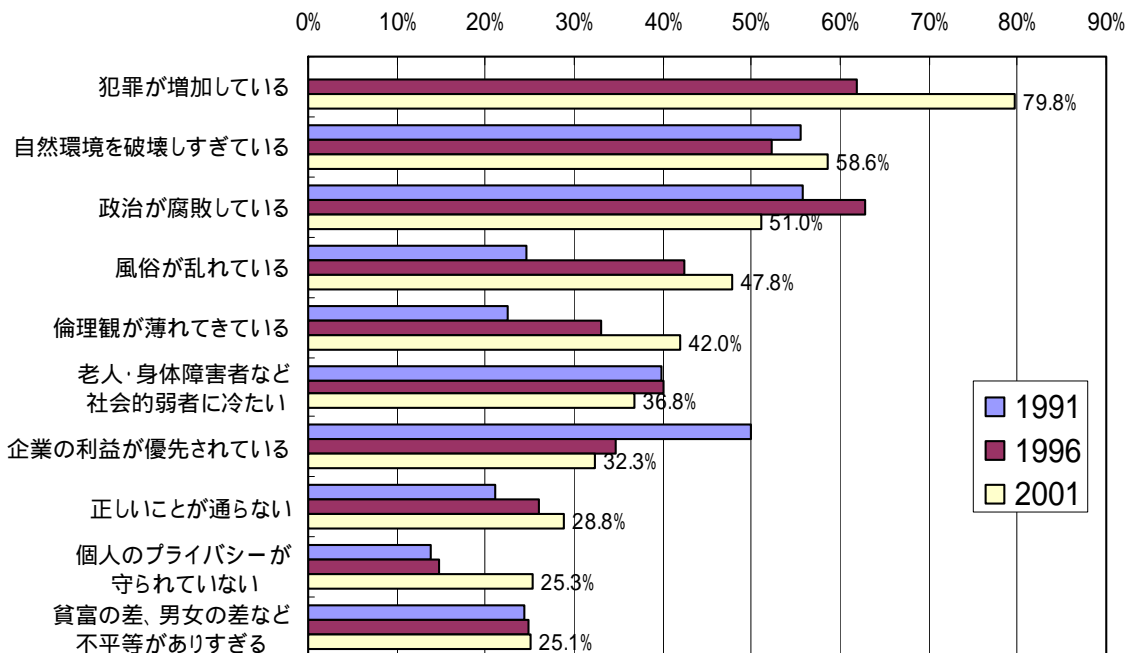
(図1 - 6) Q.たいいていの方は、他人の役に立とうとしていると思うか。それとも、自分のことだけ気を配っていると思うか。



出典：統計数理研究所「国民性の研究 第11次全国調査」

社会に対する不安要素としては、犯罪の増加や自然環境の破壊を挙げる人の割合が多い。また、風俗の乱れや倫理観の低下など、道徳面での後退を懸念する人が着実に増加していることがうかがえる。

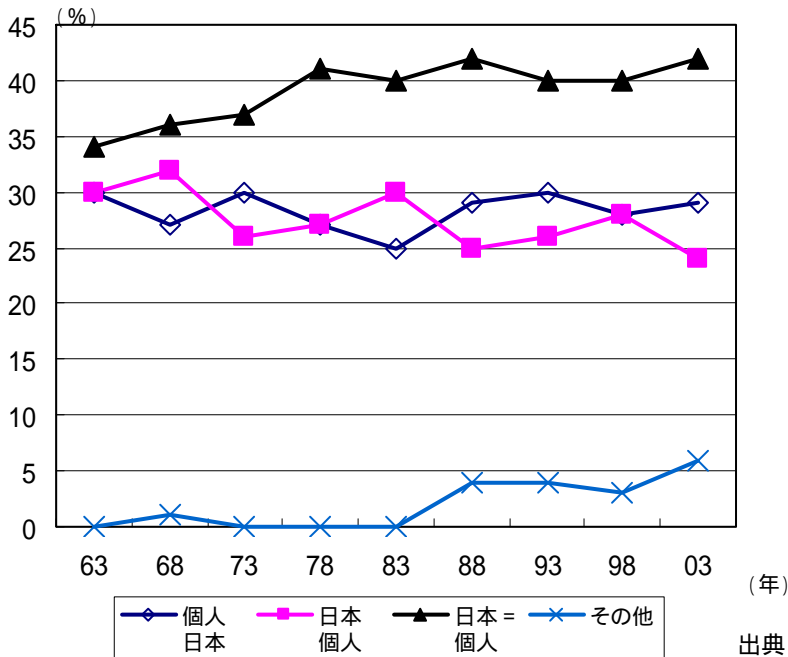
(図1 - 7) Q.社会について日頃感じていることは何か。



出典：(財)生命保険文化センター「生活者価値観調査」

個人の幸福と、日本が良くなることを同じと考える傾向が強まり、「日本が良くなってはじめて個人が幸福になる」という考えは長期的に減少傾向にある。また、国の繁栄を国民の生活の向上と結びつける考え方も強まっている。

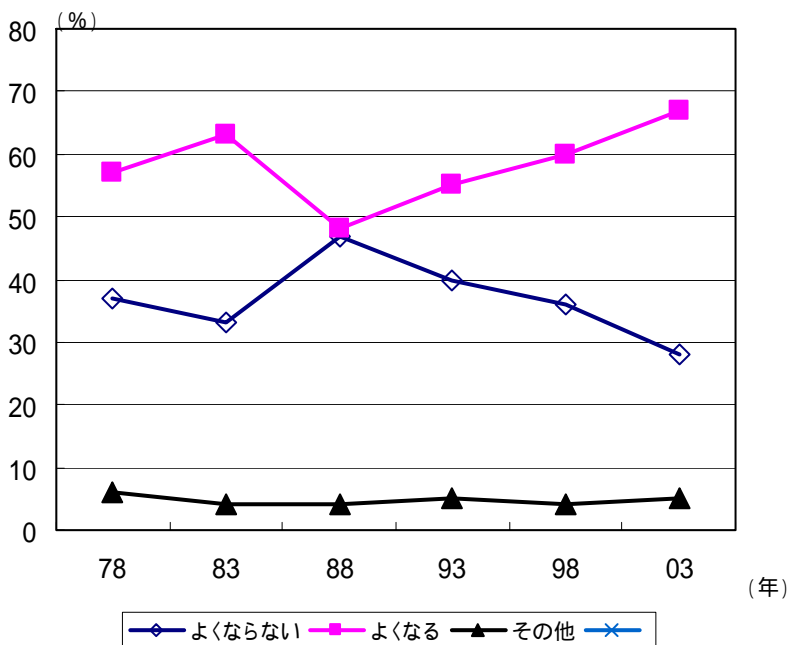
(図1 - 8) Q.個人の幸福と日本の関係について、どのように考えるか。



- 1 個人が幸福になって、はじめて日本全体がよくなる
- 2 日本がよくなって、はじめて個人が幸福になる
- 3 日本がよくなることも、個人が幸福になることも同じである。
- 4 その他

出典：統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

(図1 - 9) Q.国の繁栄についてどう考えるか。

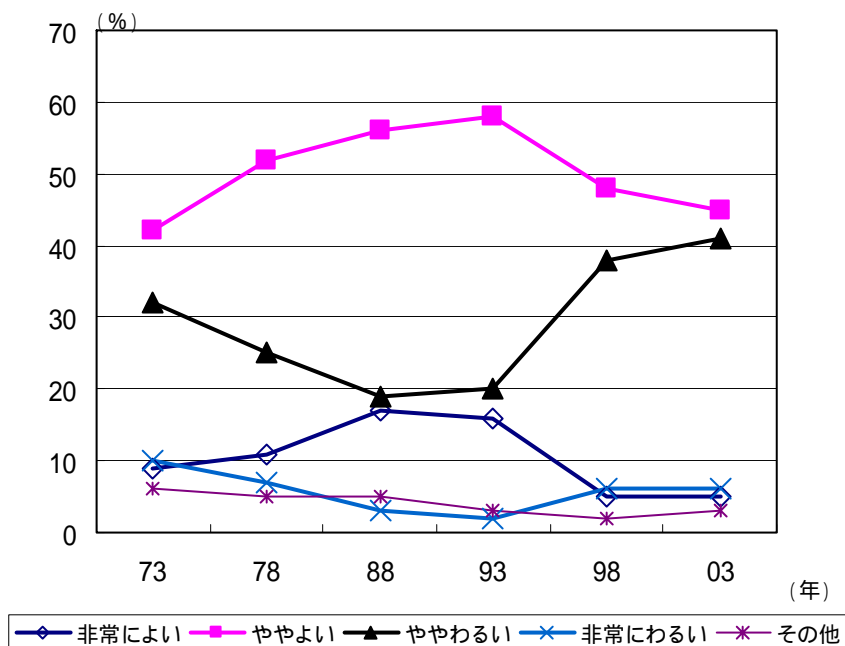


- 1 国が繁栄しても、一部の人がもうけるばかりで、国民ひとりひとりの生活はよくなるらない
- 2 国が繁栄すれば、国民ひとりひとりの生活もよくなる
- 3 その他

出典：統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

日本の生活水準については、約10年前を境に傾向が逆転し、「良い」と感じる人と「悪い」と感じる人の割合がほぼ同じとなっている。

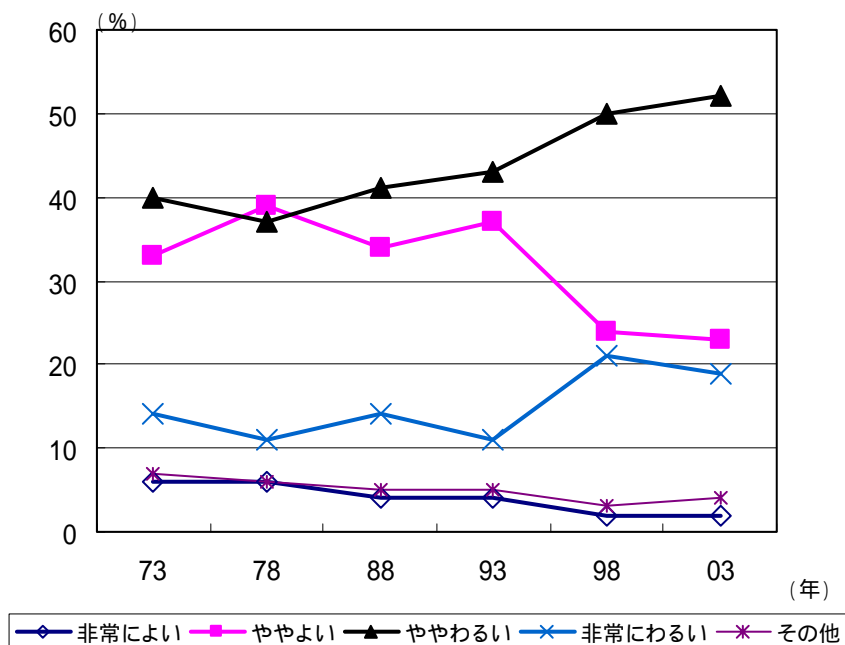
(図1 - 10) Q.日本の「生活水準」についてどう思うか。



出典：統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

心の豊かさについては、「ややわるい」と感じる人が「ややよい」を大幅に上回っており、その差は拡大を続けている。

(図1 - 11) Q.日本の「心の豊かさ」についてどう思うか。

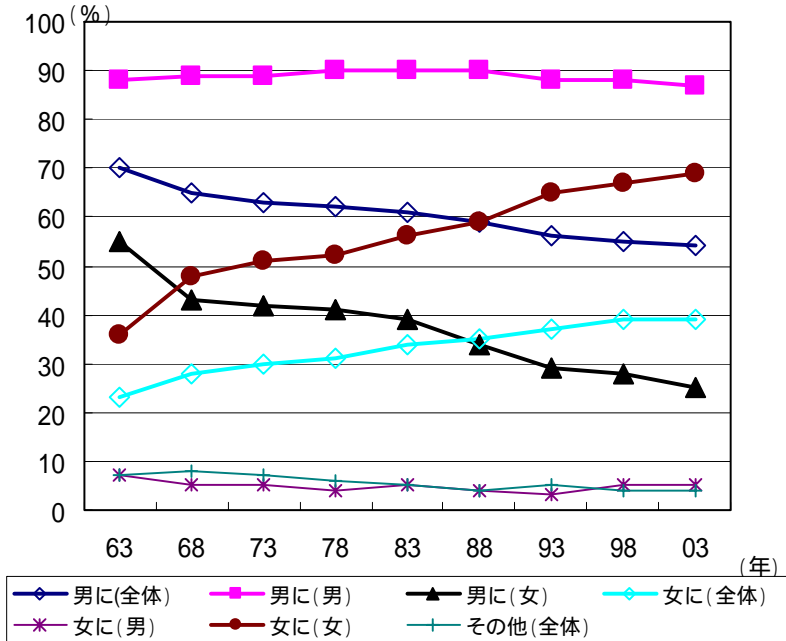


出典：統計数理研究所『国民性の研究 第11次全国調査』

(3) 性別に関する考え方

もう一度生まれ変わる場合の性別について、男性の回答にはほとんど変化が見られないが、女性の意識には大きな変化が見られる(「女」という回答が、40年間で約2倍に増えている)。

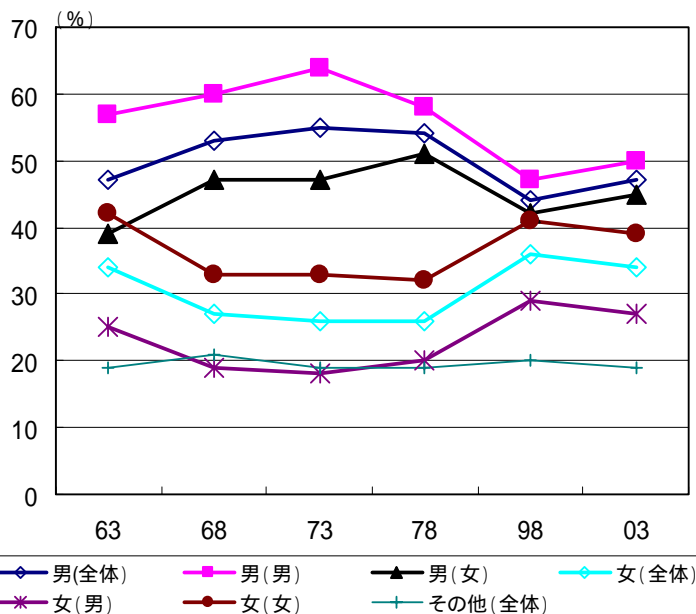
(図1 - 12) Q.もう一度生まれ変われるとしたら、男と女のどちらがよいか。



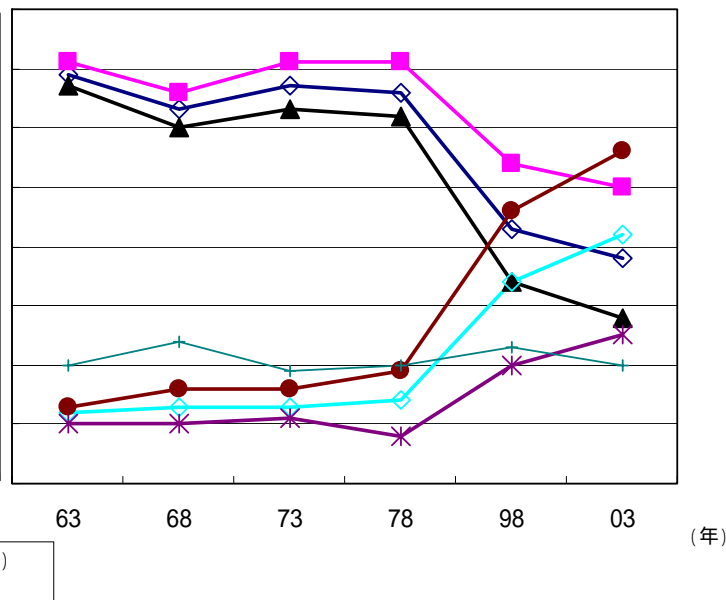
出典:統計数理研究所「国民性の研究 第11次全国調査」

「どちらの方が苦勞が多いか」については、男女の差がなくなりつつあったところが、揺り戻しの傾向が見られる。一方、「楽しみ」については性別を問わず「女」という回答が増加しており、最近の調査では全体で「女」が「男」を上回った。

(図1 - 13) Q.今の日本では、男と女のどちらの方が苦勞が多いと思うか。



(図1 - 14) Q.今の日本では、男と女のどちらの方が楽しみが多いと思うか。

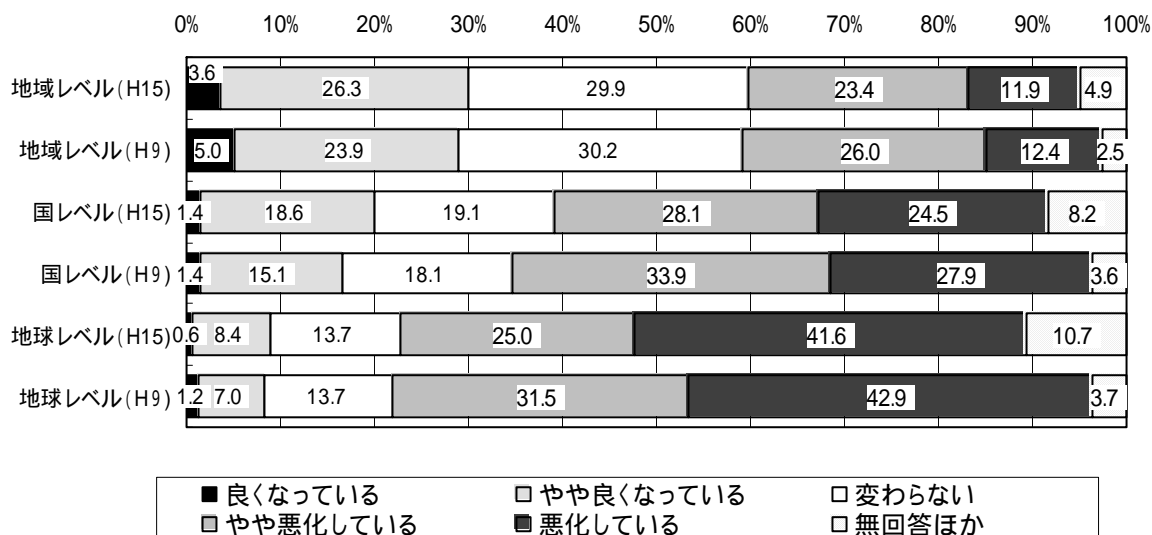


出典:統計数理研究所「国民性の研究 第11次全国調査」

2. 環境の状況についての実感

環境の状況の悪化を感じている人の割合は、地域レベル、国レベル、地球レベルの順で多くなっている。

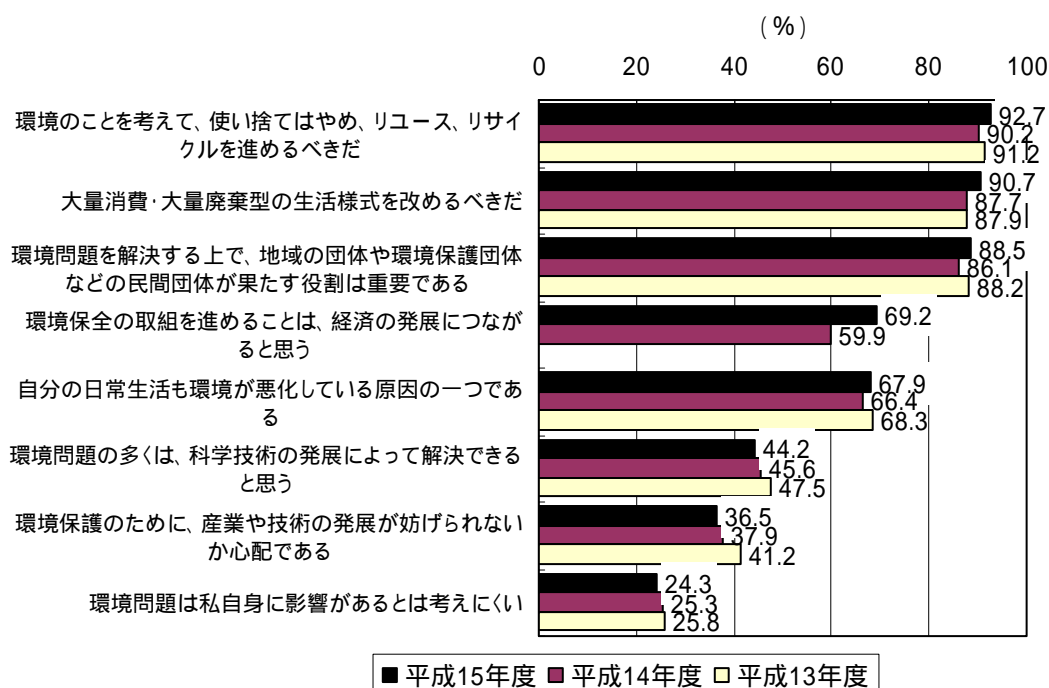
(図2 - 1) 地域レベル、国レベル、地球レベルでの環境の状況についての実感



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

環境保全により産業や技術の発展が妨げられることを心配する人が減少し、経済の発展につながると考える人が増加している。

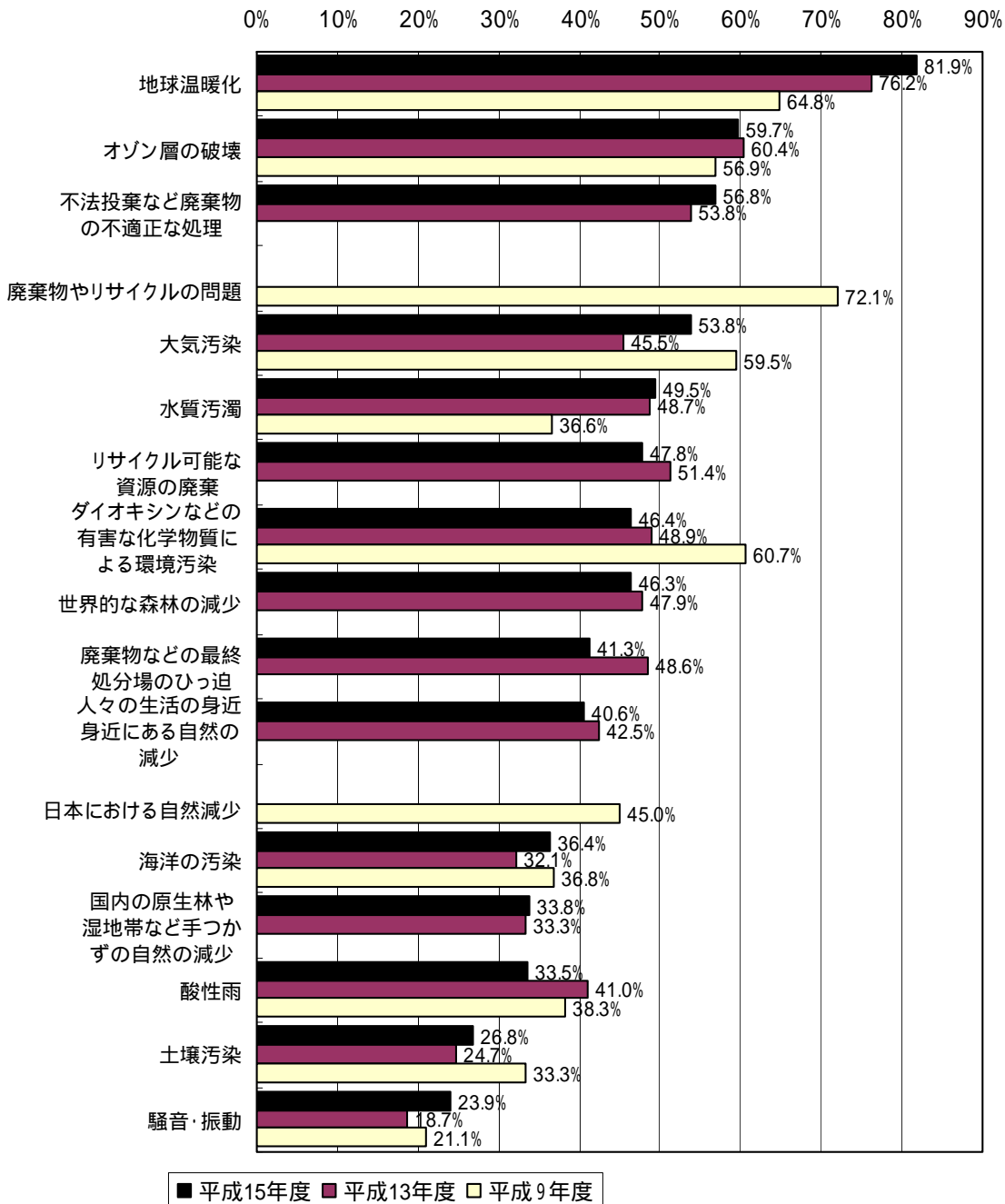
(図2 - 2) 環境問題に対する考え方(「大変そう思う」「ややそう思う」の合計)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

関心のある環境問題として、地球温暖化を挙げた人は平成9年度と比較して18ポイントと大幅な上昇を示している。

(図2 - 3) 関心のある環境問題

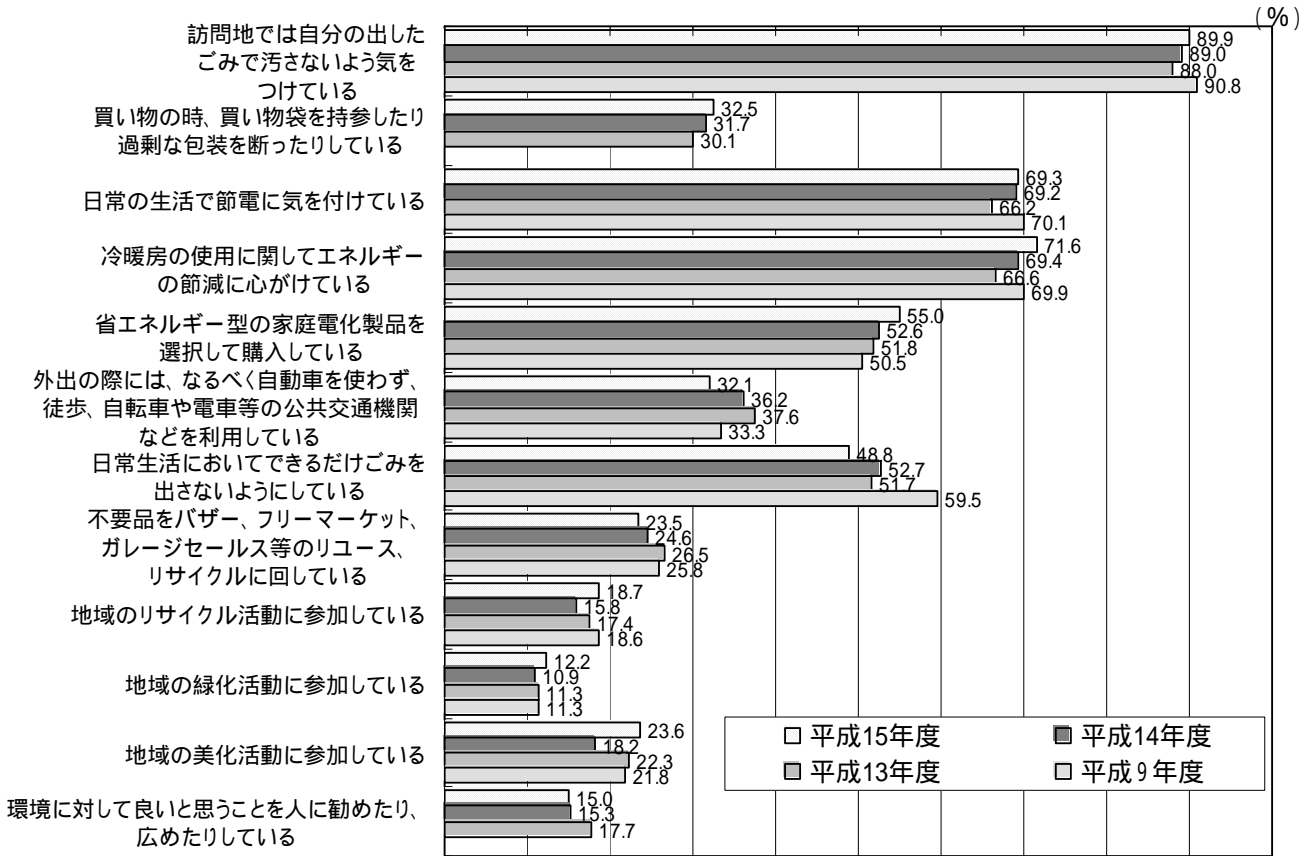


出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

3. 環境保全行動の実施状況等

過剰包装を避ける、省エネルギーを心がけるという行動を行っている人の割合は増加傾向にあるが、自動車使用の抑制、ごみの減量については減少している。

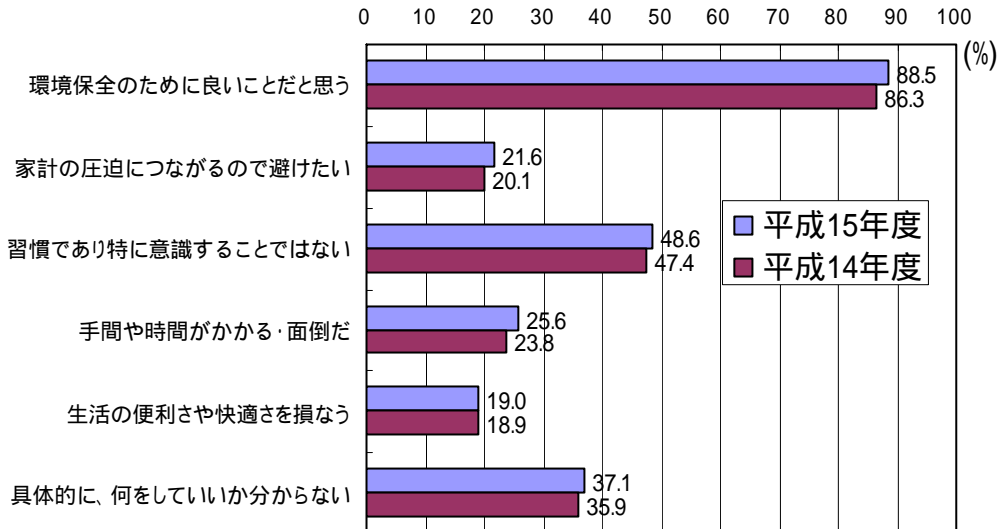
(図3 - 1) 環境保全行動の実施状況(「いつも行っている」「だいたい行っている」の合計)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

物を買うときの環境への配慮については、前向きにとらえている人の割合が多いが、一方で「具体的に何をしたらいいかわからない」と回答した人も4割近い。

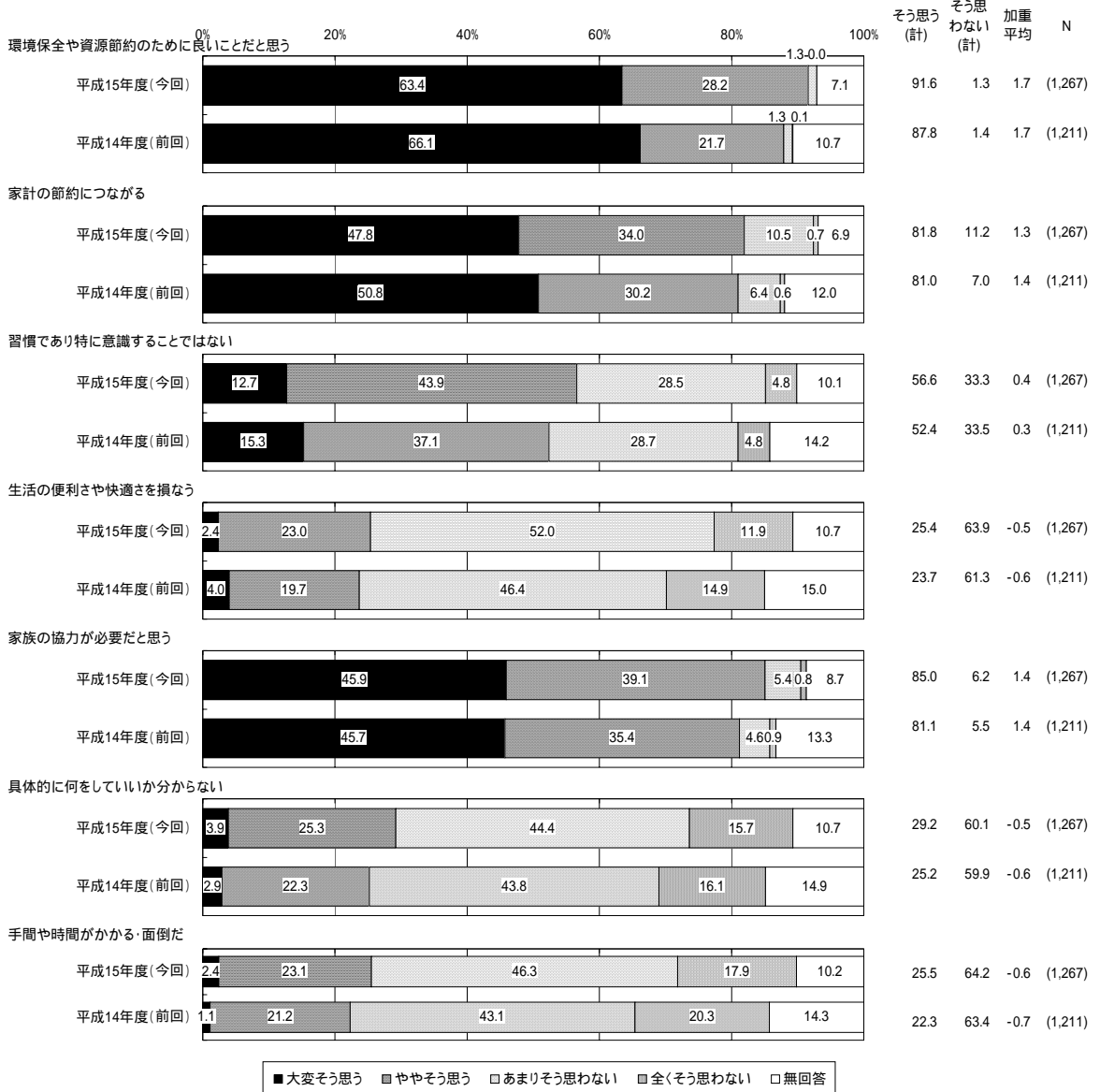
(図3 - 2) 物を買うときの環境への配慮についての意識(「大変そう思う」「ややそう思う」の合計)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

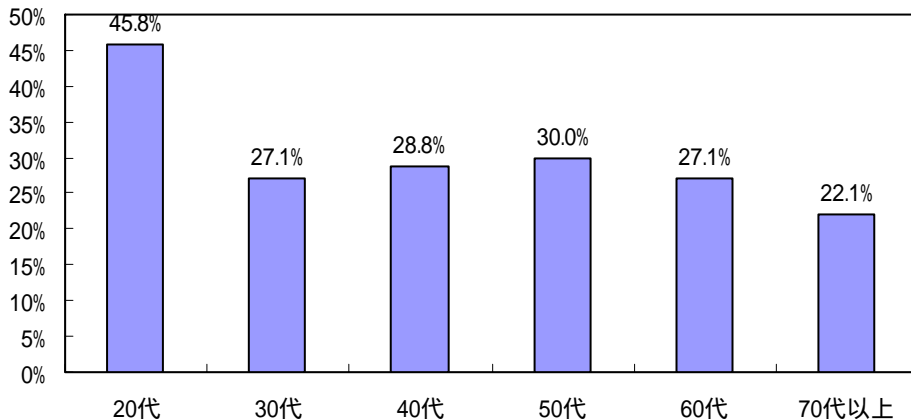
省エネルギーについては、全体的に肯定的にとらえる考え方が強まっているが、一方で、「具体的に何をしたいかわからない」及び「手間や時間がかかる・面倒だ」についても増加傾向がみられる。

(図3 - 3) 省エネルギーに対する考え方



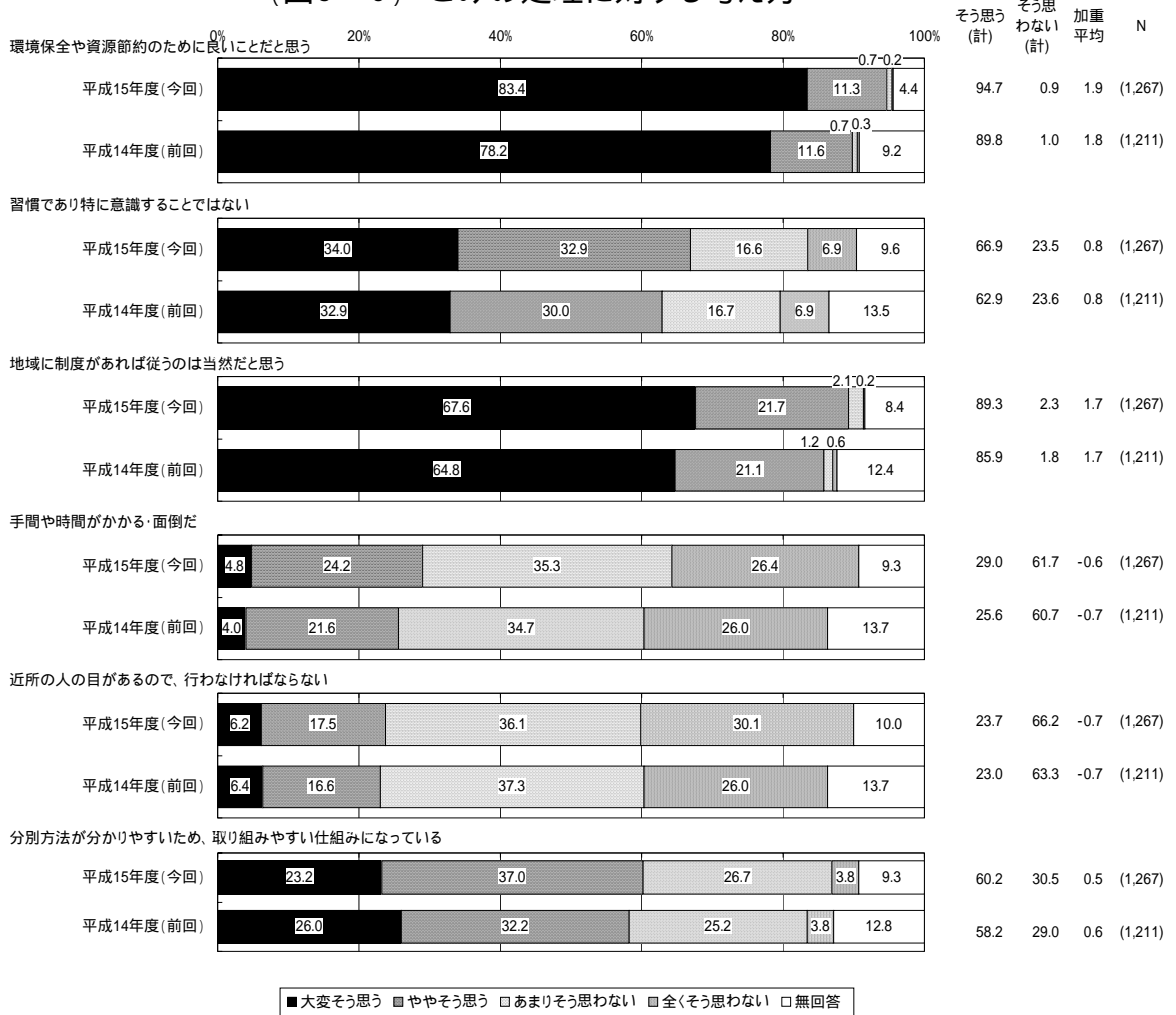
出典：環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

(図3 - 4) 省エネルギーに対する考え方「具体的に何をしたいかわからない」の年代別内訳(15年度・「大変そう思う」と「ややそう思う」の合計)



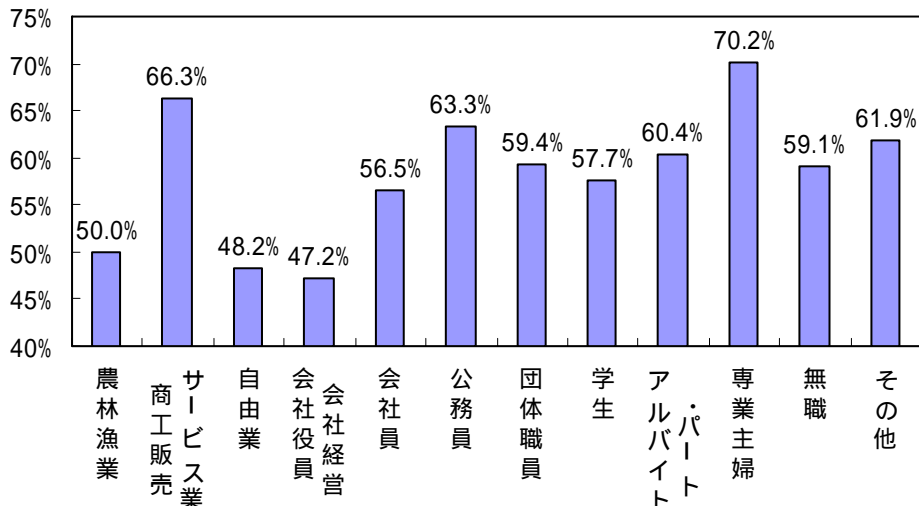
家庭のごみを分別して出すことについては、地域のルールに従うのを当然だとする回答が9割近くに上るなど、全体的に意識が進展しており、「分別方法がわかりやすく、取り組みやすい」という回答も6割に達している。

(図3 - 5) ごみの処理に対する考え方



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

(図3 - 6) ごみの処理に対する考え方「分別方法がわかりやすいため、取り組みやすい仕組みになっている」の職業別内訳(15年度「大変そう思う」と「ややそう思う」の合計)

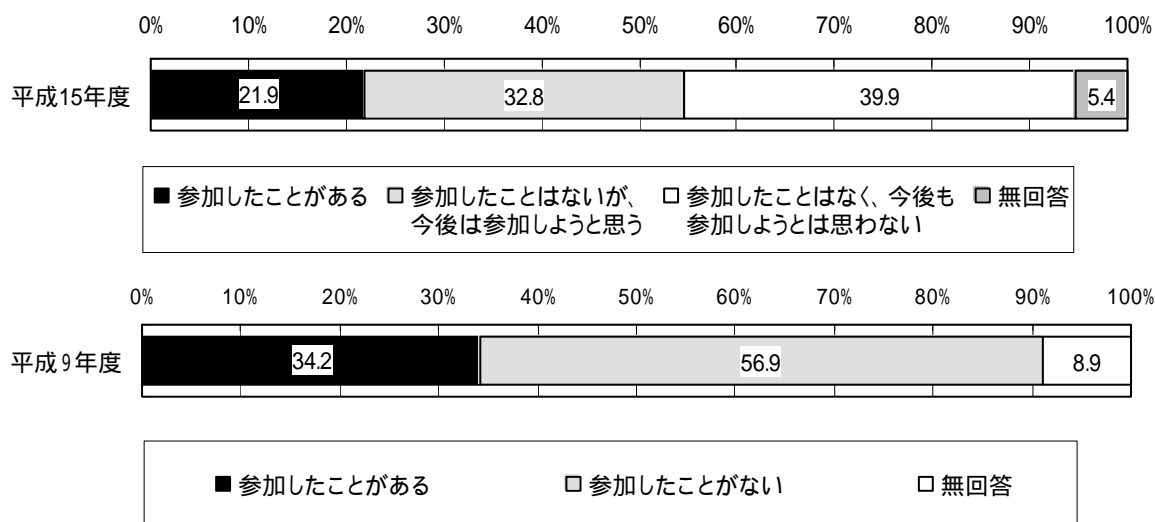


出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

4. 環境保全活動を行う民間団体への参加

環境保全団体等への参加経験があると答えた人は21.9%にとどまる一方、参加したことはなく今後も参加意向なしと答えた人は4割に上る。

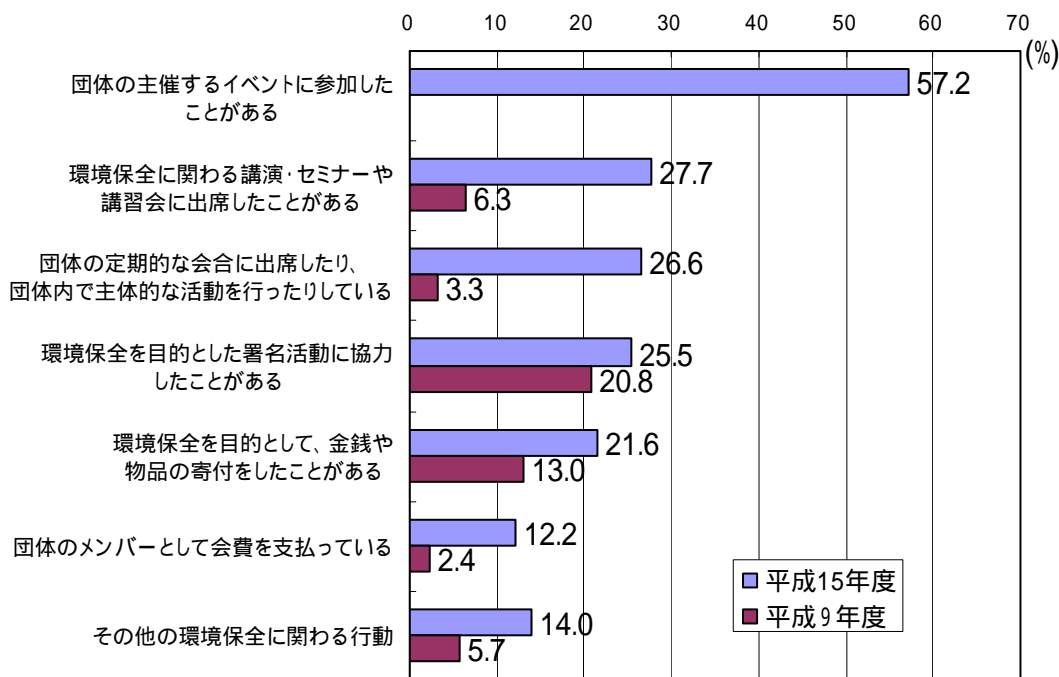
(図4 - 1) 環境保全団体等への参加の有無



出典：環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

環境保全団体等への参加内容別に平成9年度調査と比較すると、各項目とも増加している。

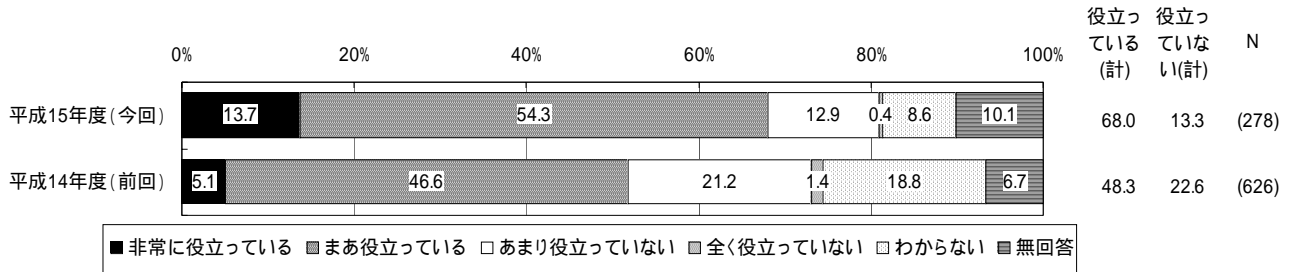
(図4 - 2) 環境保全団体等への参加の内容



出典：環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

環境保全団体等への参加による環境問題解決貢献度について、肯定的にとらえる回答が増加しており、民間団体の役割についての認識の高まりがうかがえる。

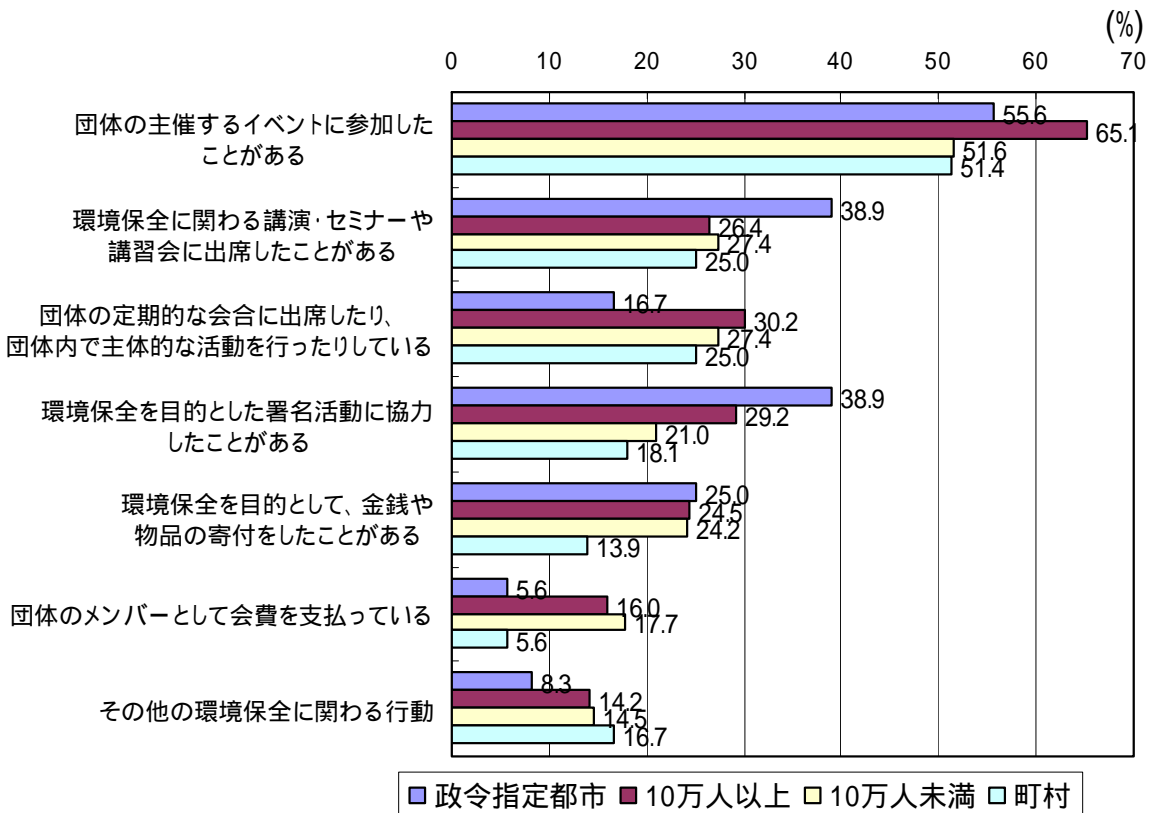
(図4-3) 環境保全団体等への参加による環境問題解決貢献度



出典:環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

環境保全団体等への参加内容を都市規模別に見ると、概ね規模が大きくなるに従って参加の割合が増えるが、団体のメンバーとしての活動については、政令指定都市での回答割合は低くなっている。

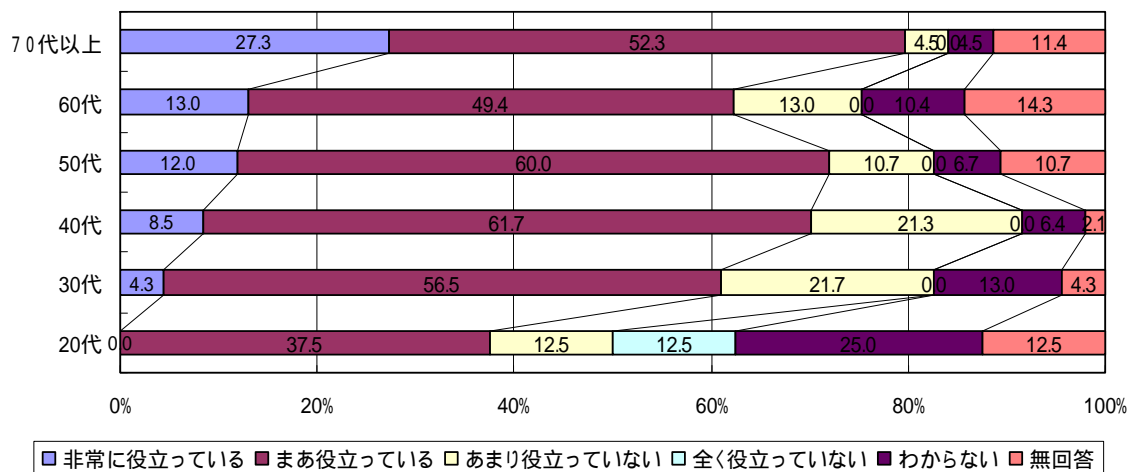
(図4-4) 環境保全団体等への参加の内容(都市規模別・15年度)



出典:環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

民間団体への参加による環境問題解決貢献については、年齢層が高くなるにつれて肯定的にとらえる回答が増加し、特に70代以上では8割に上る。その一方、20代では否定的にとらえる回答が25%に上り、若年層の地域社会との結びつきの弱さを感じさせる。

(図4 - 5) 民間団体への参加による環境問題解決貢献の実感(年齢層別・15年度)

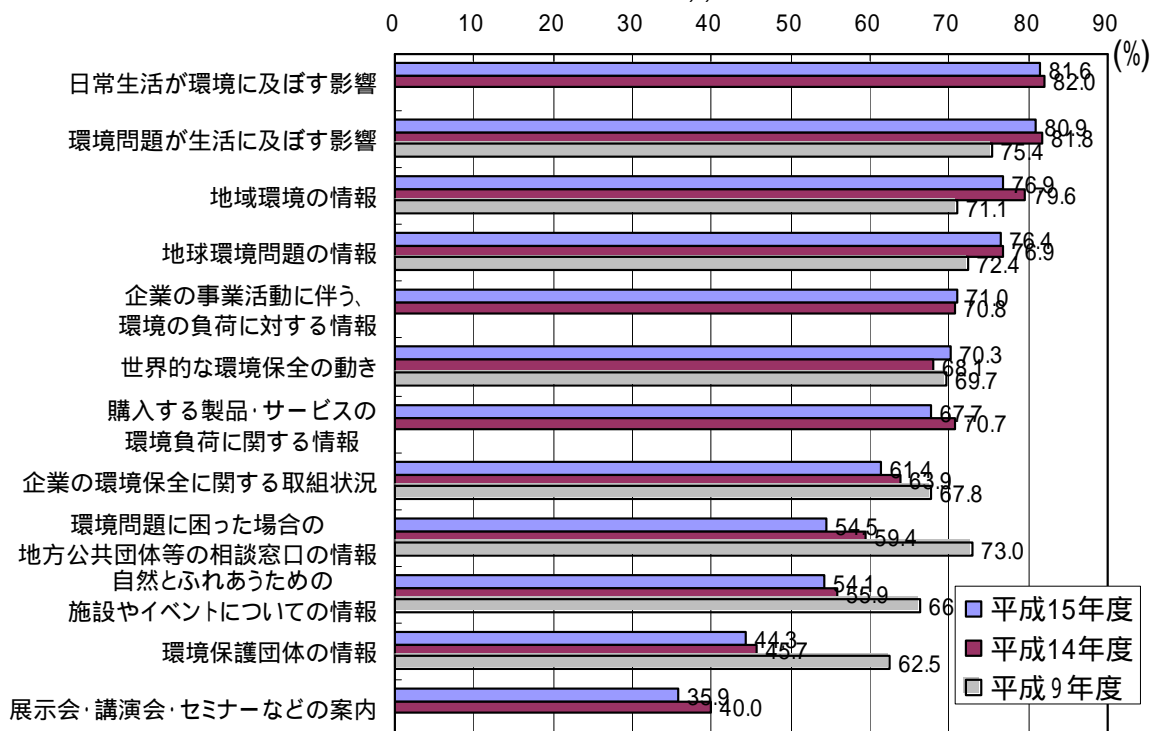


出典:環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

5. 環境情報への関心・満足度

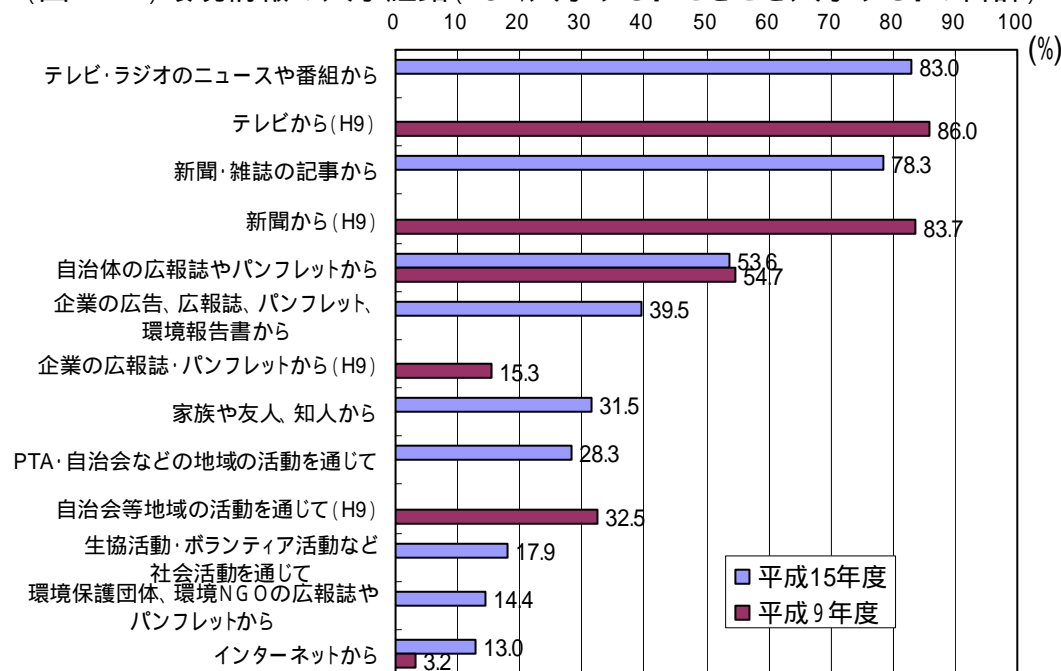
「企業の環境保全に関する取組状況」「地方公共団体等の相談窓口の情報」「施設やイベントについての情報」「環境保護団体の情報」については、関心の高さが減少傾向にある。また、情報の入手経路として最も多いのはマスメディアであるが、一方でインターネットの増加が著しい。

(図5 - 1) 環境情報への関心の高さ(「大変関心がある」「やや関心がある」の合計)
(平成9年度については、「欲しい環境情報」「接しているがもっと欲しい」「接していないのでもっと欲しい」の合計)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

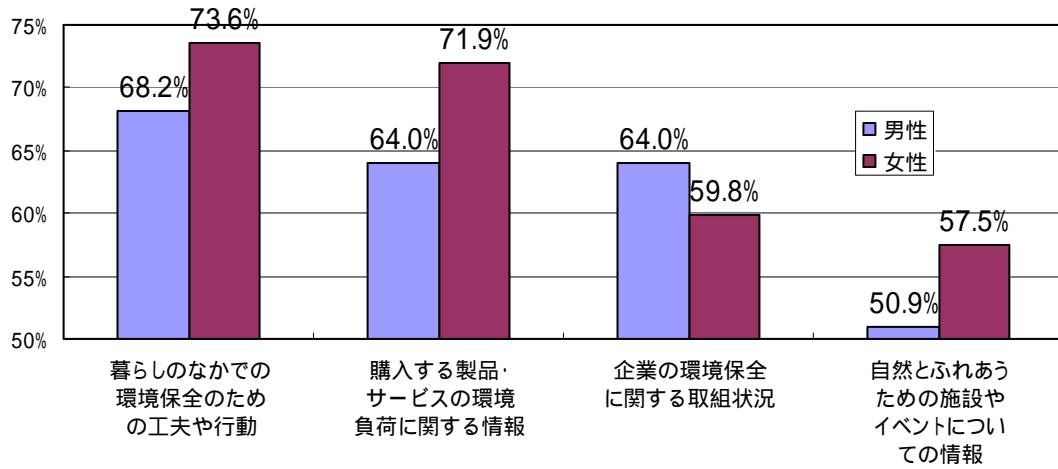
(図5 - 2) 環境情報の入手経路(「よく入手する」「ときどき入手する」の合計)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

関心度を性別に見ると、「暮らしのなかでの環境保全のための工夫や行動」等生活に関わりが深い情報については、女性の関心が高い。

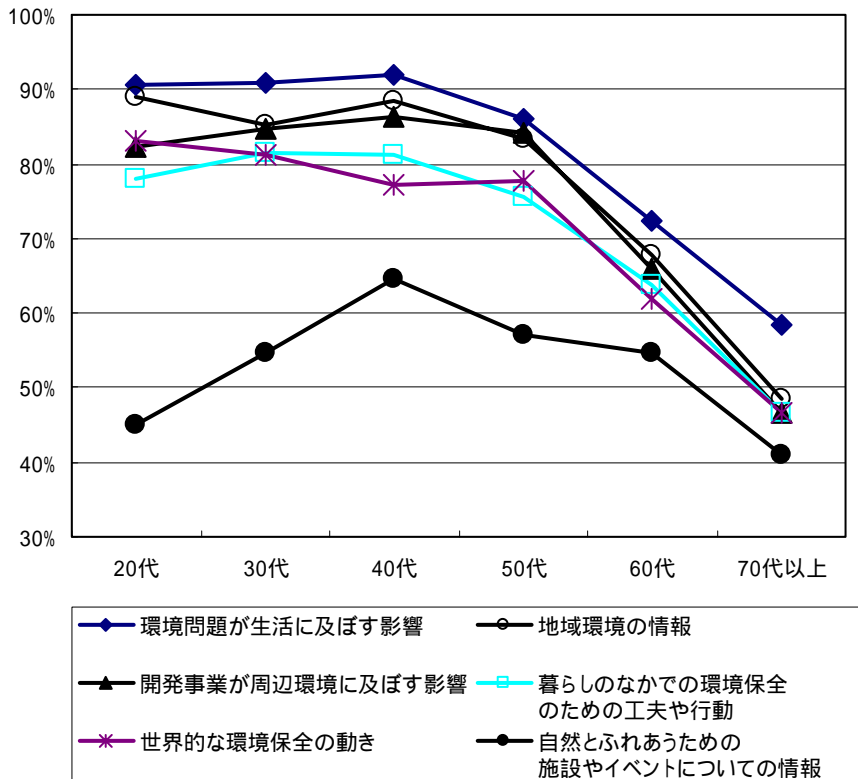
(図5 - 3) 環境情報への関心の高さ(性別・15年度)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

年齢層別では、40代を境にして、関心度の高低が明確に分かれる傾向がうかがえる。

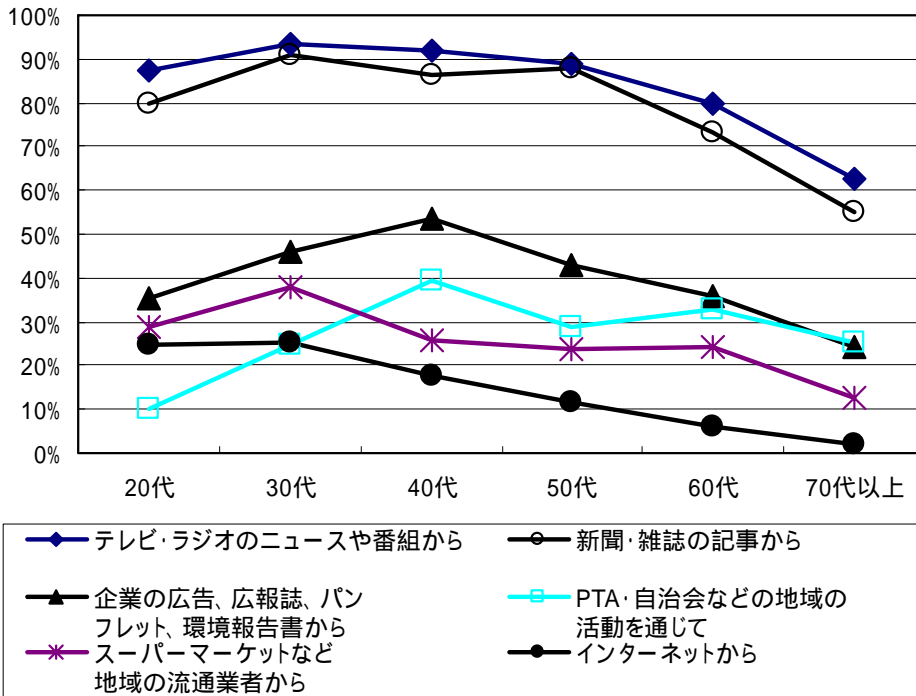
(図5 - 4) 環境情報への関心の高さ(年齢層別・15年度)



出典：環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」

環境情報の入手経路として、若年層はインターネットを積極的に活用しているが、その他は概ね40代が様々な経路をとって環境情報を入手していることがうかがえる。

(図5 - 5) 環境情報の入手経路(年代別、15年度)

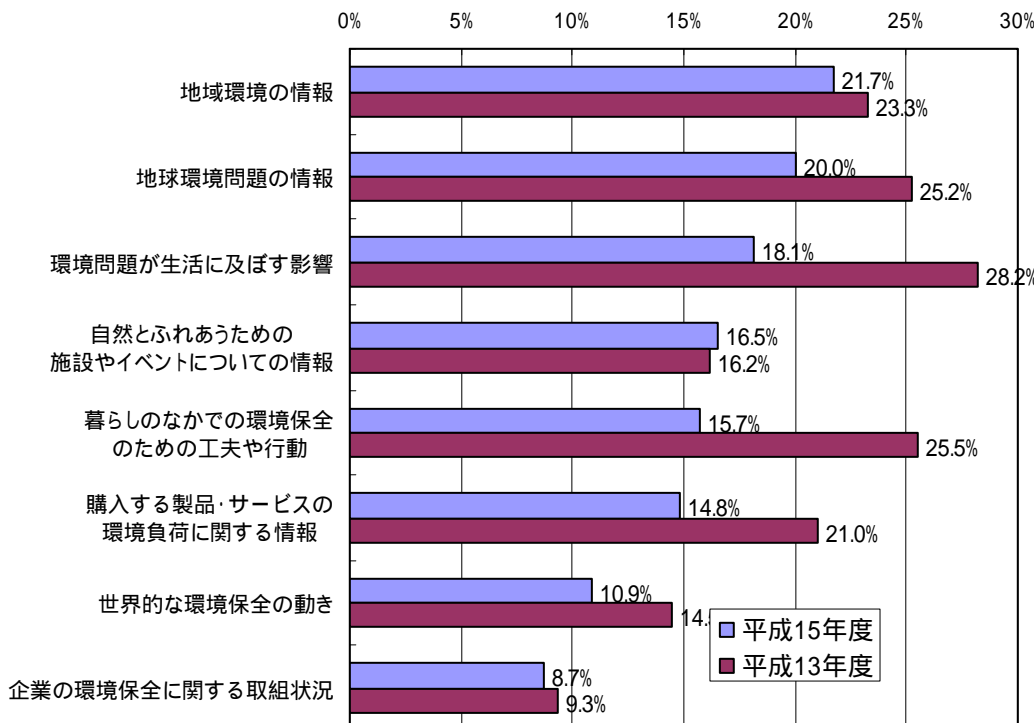


「よく入手する」「ときどき入手する」の合計

出典：環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

環境情報の満足度について、13年度と比較すると、「環境問題が生活に及ぼす影響」及び「暮らしのなかでの環境保全のための工夫や行動」での下落が大きく、生活に関わる環境情報への欲求の高まりがうかがえる。

(図5 - 6) 環境情報の満足度(「十分満足している」「まあ満足している」の合計)



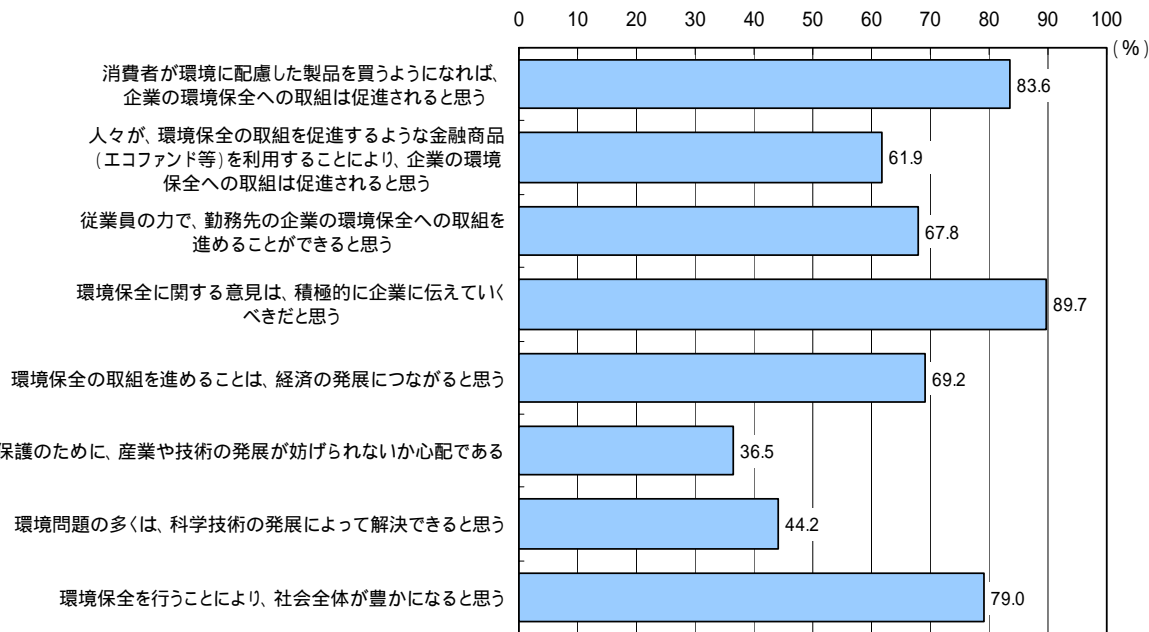
13年度調査においては、環境情報の充足度を尋ねており、「十分情報を得ている」「まあ情報を得ている」の合計となっている。

出典：環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

6. 環境と経済の好循環に関する意識

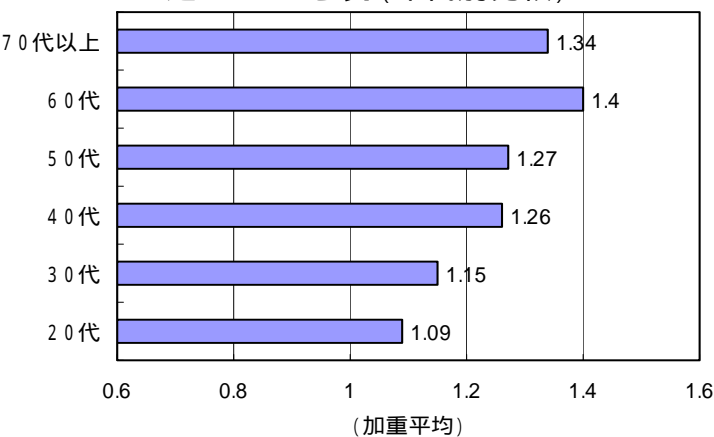
環境保全の取組の進展が経済の発展につながると考える人が7割近いなど、全体に環境と経済の好循環に前向きな傾向がうかがえる。

(図6-1) 環境と経済の好循環に関する考え方(「大変そう思う」「ややそう思う」比率の合計)

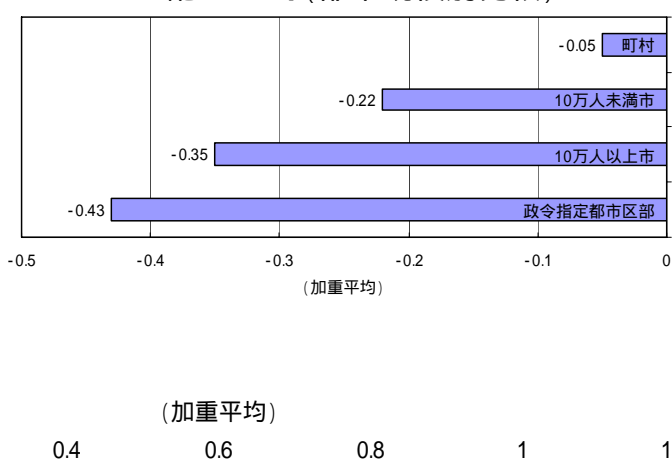


出典:環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査』

(図6-2) 「消費者が環境に配慮した製品を買うようになれば、企業の環境保全への取組は促進されると思う」(年代別比較)

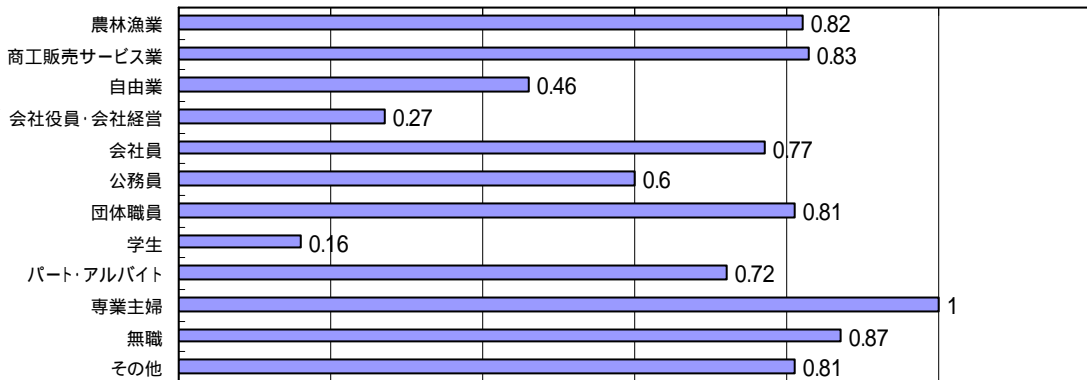


(図6-3) 「環境保護のために、産業や技術の発展が妨げられないか心配である」(都市規模別比較)



(図6-4)

「環境保全の取組を進めることは、経済の発展につながると思う」(職業別比較)



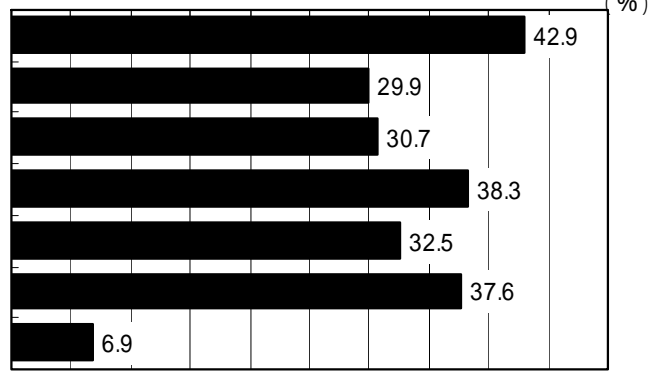
「大変そう思う」に2点、「ややそう思う」に1点、「あまりそう思わない」に-1点、「全くそう思わない」に-2点を与えて算出したもの。

物・サービスの購入の際の環境配慮については、年代が上がるにつれて肯定的な回答の割合が増加する。世帯年収との関係でみると、比較的低年収の層での肯定率が高いが、年代・世帯年収別に詳細に分析すると、世帯年収と肯定率の関連性については、一概にはいえないことがわかる。

(図6-5) 環境と経済の好循環に関連する環境配慮行動の実施状況(「いつも行っている」「ときどき行っている」の合計)

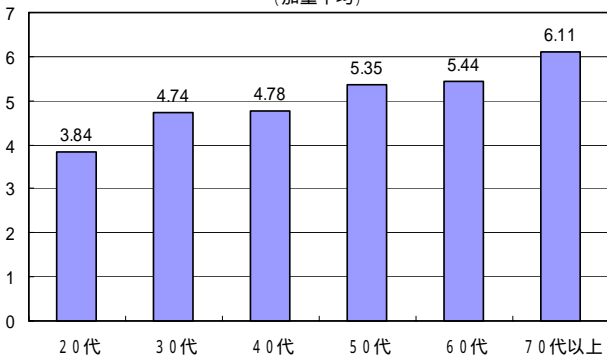
0 5 10 15 20 25 30 35 40 45 50 (%)

再生紙などのリサイクル商品を購入している
 物・サービスを購入するときは環境への影響を考慮してから
 地球にやさしいエコマーク等のついた商品を購入することを
 心がけている
 買い物の時は、製品の成分表示をチェックして選んでいる
 買い物の時、買い物袋を持参したり過剰な包装を断ったり
 している
 使い捨て商品はなるべく買わないようにしている
 企業の環境保全の取組を促進するような金融商品(エコ
 ファンド等)を利用している



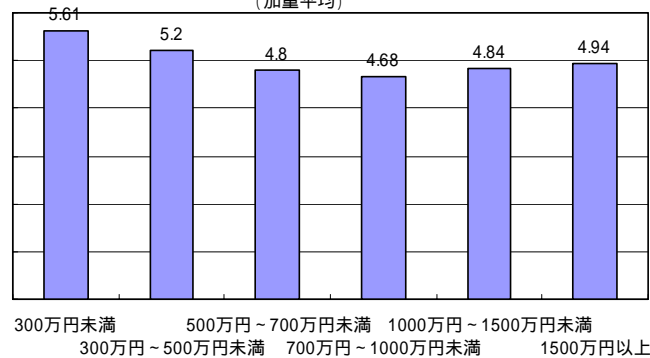
(図6-6) 「物・サービスを購入するときは環境への影響を考慮してから選択している」(年代別比較)

(加重平均)



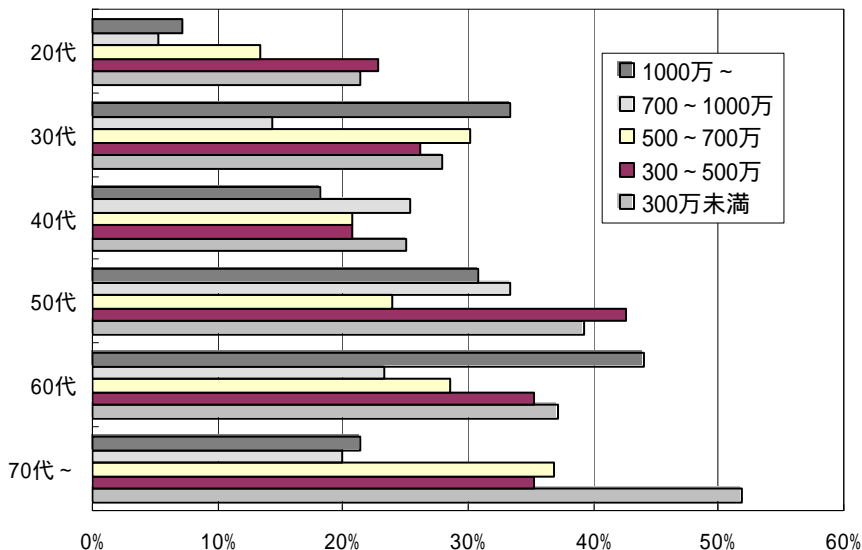
(図6-7) 「物・サービスを購入するときは環境への影響を考慮してから選択している」(世帯年収別比較)

(加重平均)



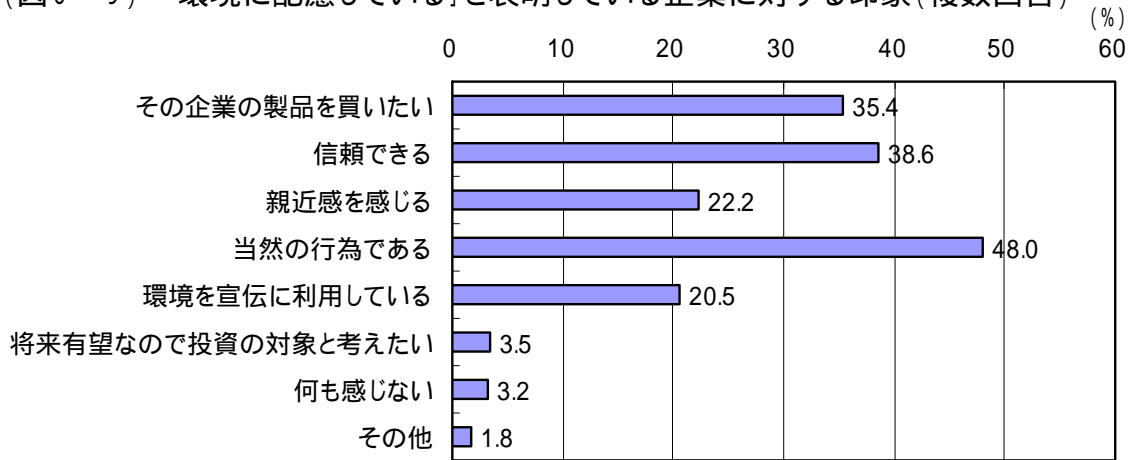
「いつも行っている」に10点、「だいたい行っている」に8点、「ときどき行っている」に5点、「あまり行っていない」に2点、「全く行っていない」に0点を与えて算出したもの。

(図6-8) 「物・サービスを購入するときは環境への影響を考慮してから選択している」(世帯年収別・年代別クロス、「いつも行っている」「ときどき行っている」の合計の割合)

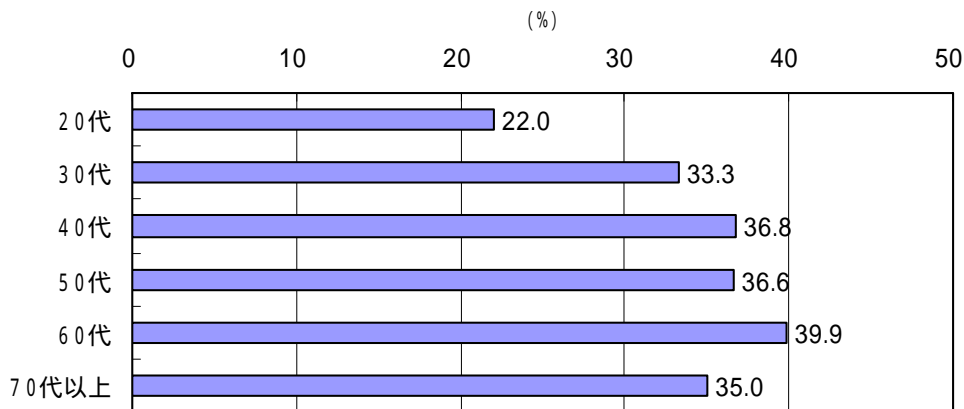


環境に配慮していることを表明している企業に対して肯定的な評価をもつ人の割合は、概ね年代が上がるにつれて増加している。逆に否定的にとらえる人の割合は若年層に多い。

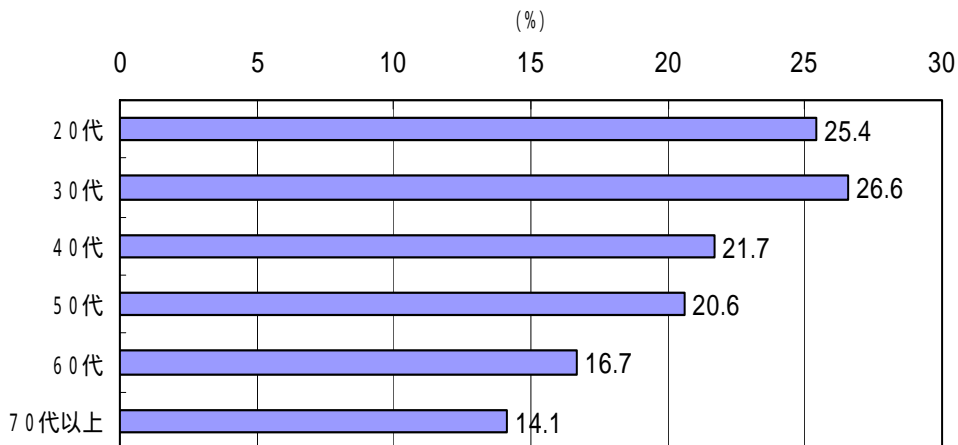
(図6 - 9) 「環境に配慮している」と表明している企業に対する印象(複数回答)



(図6 - 10) 「その企業の製品を買いたい」(年代別比較)

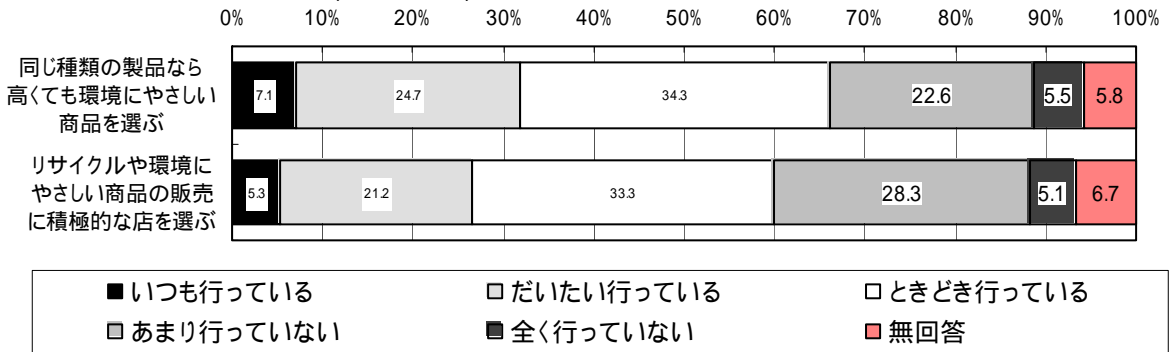


(図6 - 11) 「環境を宣伝に利用している」(年代別比較)

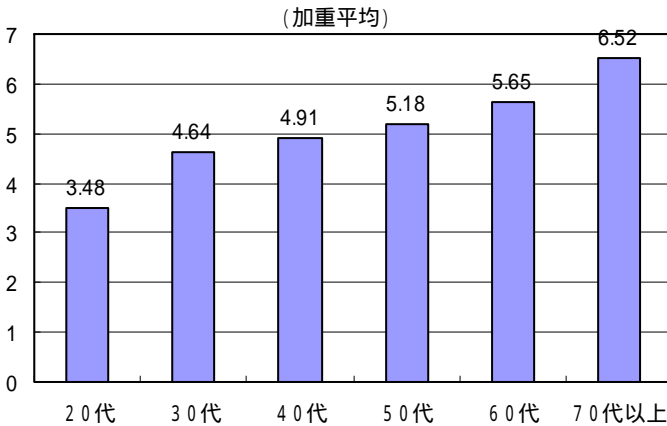


「同じ種類の製品なら高くても環境にやさしい商品を選ぶ」と答えた人の割合は、年代が上がるにつれて増加している。世帯年収との関係でみると、比較的低年収の層での肯定率が高いが、年代・世帯年収別に詳細に分析すると、世帯年収と肯定率の関連性については、一概にはいえないことがわかる。

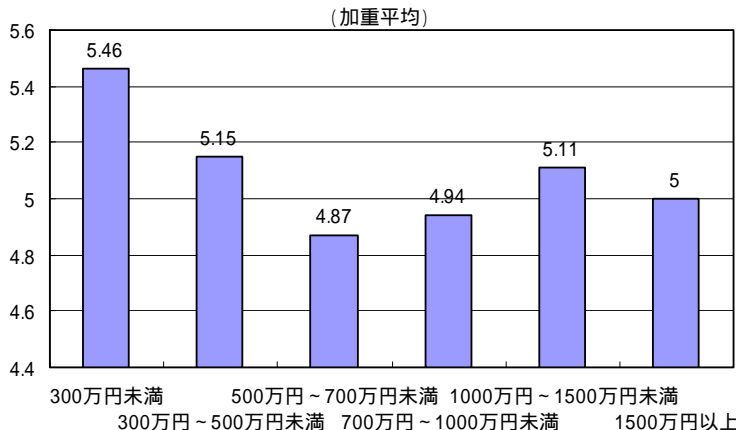
(図6-12) 買い物の際の環境配慮状況



(図6-13) 「同じ種類の製品なら高くても環境にやさしい商品を選ぶ」(年代別比較)

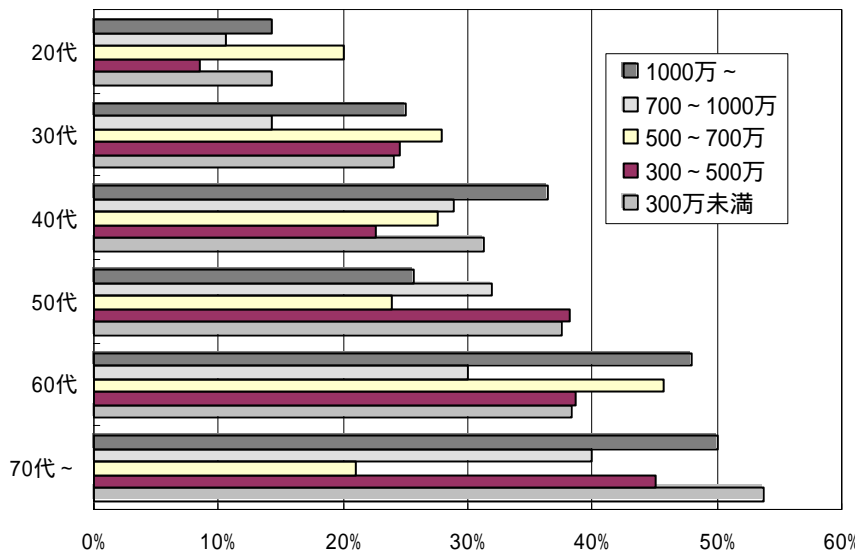


(図6-14) 「同じ種類の製品なら高くても環境にやさしい商品を選ぶ」(世帯年収別比較)



「いつも行っている」に10点、「だいたい行っている」に8点、「ときどき行っている」に5点、「あまり行っていない」に2点、「全く行っていない」に0点を与えて算出したもの。

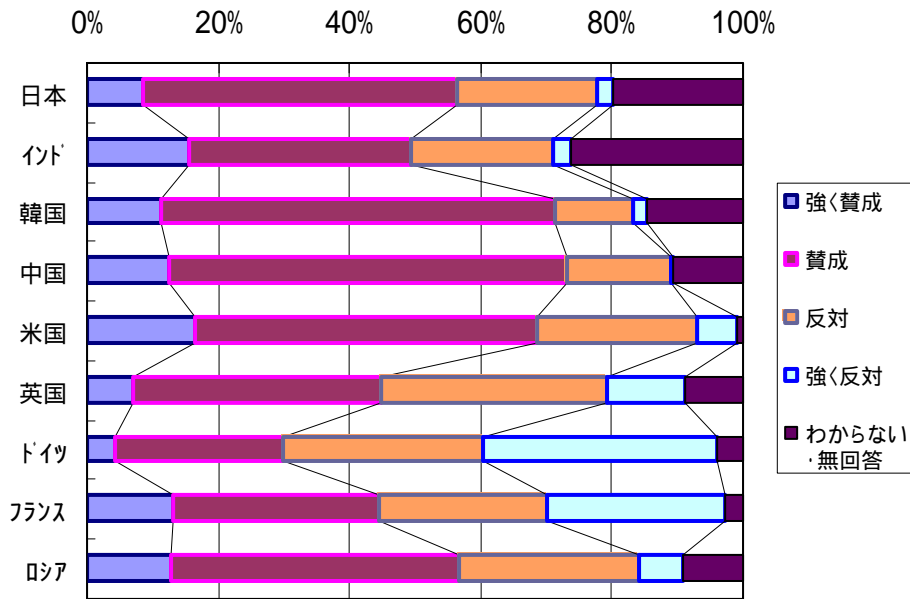
(図6-15) 「同じ種類の製品なら高くても環境にやさしい商品を選ぶ」(世帯年収別・年代別クロス、「いつも行っている」「ときどき行っている」の合計の割合)



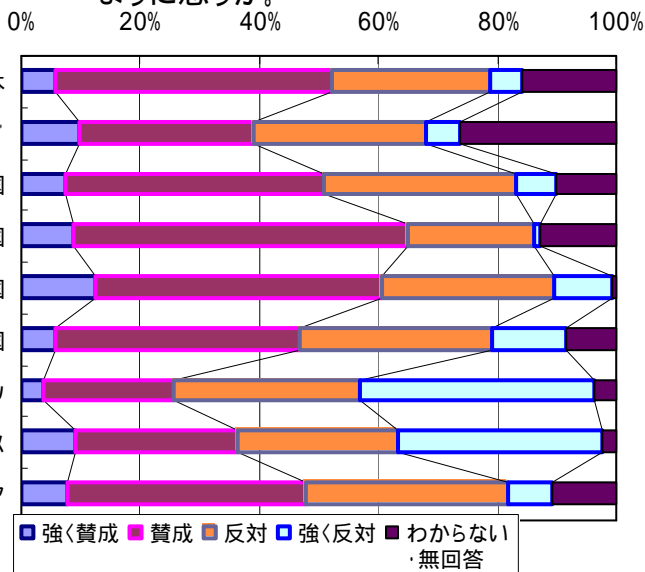
7. 国際比較

一般的に、環境保全意識が高いと考えられるヨーロッパ諸国(英、独、仏)において、環境汚染の防止に伴う金銭負担を嫌う傾向が強いことがうかがわれる。

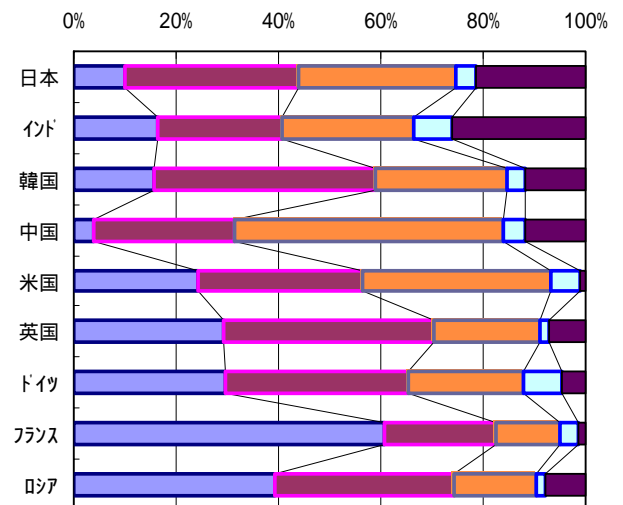
(図7 - 1) Q.「環境汚染防止に使われるなら収入の一部を差し出す」という意見についてどのように思うか。



(図7 - 2) Q.「環境汚染の防止のために使われるなら、増税されてもよい」という意見についてどのように思うか。



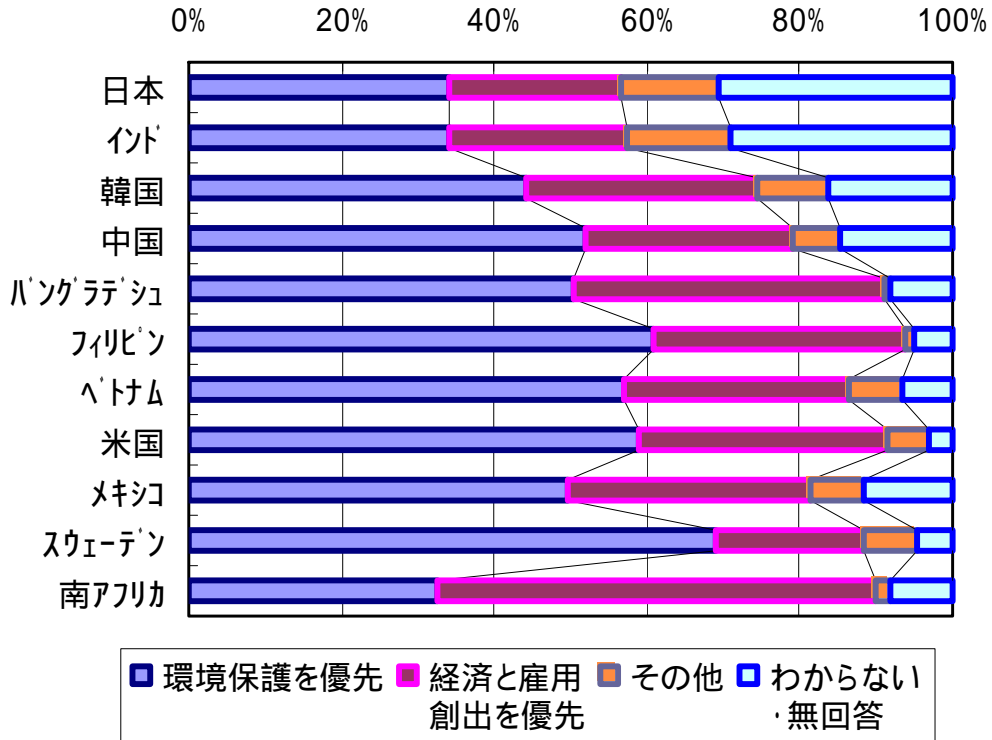
(図7 - 3) Q.「政府は環境汚染を減らすべきであるが、金銭的負担は嫌だ」という意見についてどのように思うか。



出典:世界価値観調査協会(World Values Survey Association) 『世界価値観調査2000』

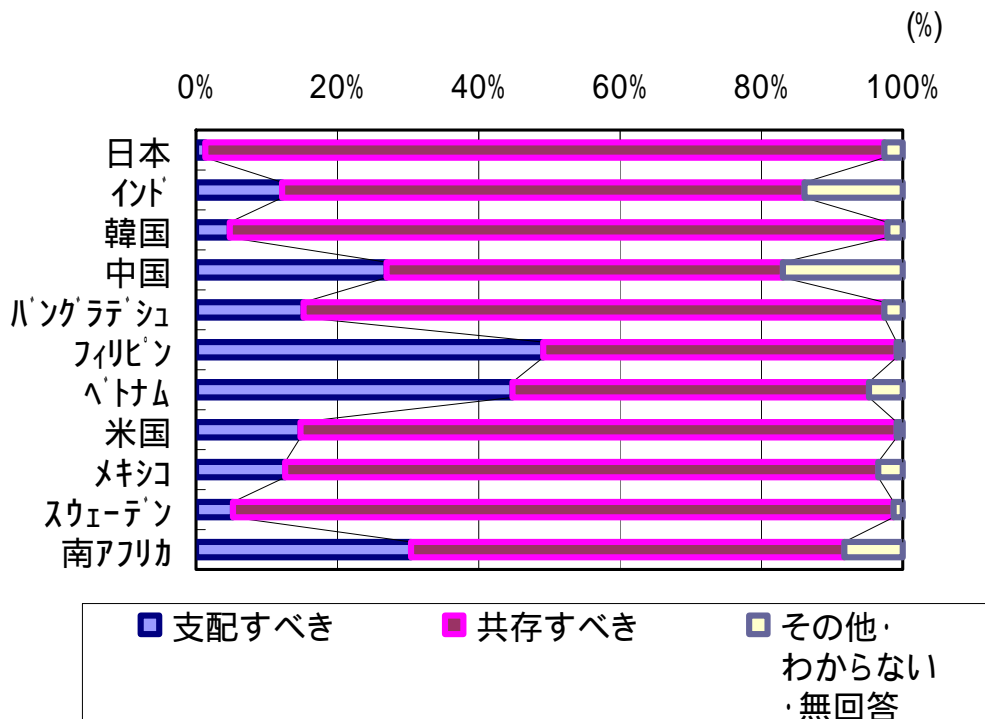
環境保護と経済成長のどちらを優先するかという問に関して、わが国は国際的にみて、明確に二者択一の回答をしない人の割合が高いことがうかがわれる。

(図7-4) Q.環境保護と経済成長の議論において、あなたの考えに近いのはどちらか。



出典：世界価値観調査協会(World Values Survey Association) 『世界価値観調査2000』

(図7-5) Q.自然と人間の関係について、あなたの考えに近いのはどちらか。



出典：世界価値観調査協会(World Values Survey Association) 『世界価値観調査2000』